

学習院大学言語共同研究所紀要

第 14 号 (1991)

Bulletin of the Language Institute of  
Gakushuin University, No. 14 (1991)

学習院大学言語共同研究所

東京・目白 1991

朝鮮語のオノマトペ  
——擬声擬態語と派生・単語結合・  
シンタックス・テキストについて——

野 間 秀 樹

本稿は朝鮮語の擬声擬態語に関する派生・単語結合・シンタックス・テキストの諸問題を論ずる。

## 1. 擬声擬態語と派生

### 1-1. 擬声擬態語とその派生語

朝鮮語の擬声擬態語は単にいわゆる副詞にのみ見られるばかりでなく、更に動詞・形容詞・名詞へと、多くの派生語を作り出している。日本語の「ばたばた」と「ばたばたする」「ばたつく」などとの関係に似ている。これらの派生には次のような形式が用いられる：

#### ①動詞をつくるもの

-하다 [hada]：擬声擬態語につく。ただし擬声語の場合は終止形で文末に用いられることは比較的少ない。名詞形式にもつく。非常に生産的である。一音節語につくことは少ない。

따르릉 [ʔarurung] (るるる：電話の音) >

따르릉하다 [ʔarurunghada] (るるると鳴る)

술쩍 [sulʔʃɔk] (さっと、こっそり) >

술쩍하다 [sulʔʃɔkhada]

(ちょろまかす：他人のものをかすめとる)

두근두근 [tugundugum] (どきどき：胸が高鳴るさま) >

두근두근하다 [tugundugumhada] (どきどきする)

(=두근거리다)

-거리다 [korida]：多くは2音節の擬声擬態語につく。2音節以外の擬声擬態語形式にはつきにくい。動的な意味のものにつく。多回的な意味を表す。非常に生産的である。

중얼중얼 [tʃuŋɔldʒuŋɔl] (ぶつぶつ : つぶやくさま) >

중얼거리다 [tʃuŋɔlgɔrida] (ぶつぶつ言う)

히우적히우적 [hɔudʒɔkʰhɔudʒɔk]

(あっぶあっぶ : 溺れてもがくさま) >

히우적거리다 [hɔudʒɔkʰkɔrida] (あっぶあっぶする)

-대다 [teda] : 比較的大きな音や声を表す擬声語につき, 盛んに声などを発するさまを表す. 擬態語にはつきにくい. 一音節語にはつかない.

낄낄 [ʔkilʔkil] (くすくす : いたずらっぽく笑うさま) >

낄낄대다 [ʔkilʔkildeda] (くすくす笑う)

덤뽕 [tɔmbɔŋ] (せかせか, あたふた)

덤뽕대다 [tɔmbɔŋdeda] (せかせかする)

-이다 [ida] : 終声 [-k]・[-ŋ] を持つ擬態語につく. 基本的に 2 音節以外の疊語形式にはつかない. 一音節語にはつかない.

홀쩍 [hulʔtʃɔk] (くすん : すすり泣くさま) >

홀쩍이다 [hulʔtʃɔgida] (くすんくすんする) (=홀쩍거리다)

뒤적뒤적 [twidʒɔkʰtwidʒɔk] (がさがさ : あちこちひっかき回して探すさま)

뒤적이다 [twidʒɔgida] (ひっかき回して探す) (=뒤적거리다)

뒤척 [twitʃʰɔk] (ごろり : 寝返りをうつさま) >

뒤척이다 [twitʃʰɔgida] (寝返りを打つ) (=뒤척거리다)

펼떡펼떡 [pʰɔllɔkʰpʰɔllɔk] (ばたばた : 旗などがはためくさま) >

펼떡이다 [pʰɔllɔgida] (はためく) (=펼떡거리다)

움직움직 [umdzigumdzik] (しきりに身動きするさま) >

움직이다 [umdzigida] (動く)

반짝 [panʔtʃak] (きらっ : すばやく小さく光るさま) から 반짝하다 [panʔtʃakkʰada] (きらめく, またたく)・반짝거리다 [panʔtʃakkʰɔrida] (きらきらする)・반짝이다 [panʔtʃagida] (きらめく, またたく)ができる. またその疊語形式 반짝반짝 [panʔtʃakkʰpanʔtʃakkʰ] (きらきら)に 반짝반짝하다 [panʔtʃakkʰpanʔtʃakkʰada] (きらきらする) という -하다 [hada] のついた形もある. 疊語形式に -거리다 [kɔrida] や -이다 [ida] をつけて用いることは極めて稀である. なおこの陰母音

形 반짝 [pɔnʔtʃɔk] (びかっ : やや大きく光ったりきらめくさま)にも同様の形がある.

なお, 남영신 (1989) には -하다 と -거리다 によるものを中心に擬声擬態語の派生動詞が 1485 語あげられている.

## ②形容詞をつくるもの

-하다 [hada] : 擬態語につく. 疊語形式にもつく.

화끈 [hwaʔkuŋ] (かっ : 顔などが急にほてるさま) >

화끈하다 [hwaʔkuŋhada] (かっとしている)

글썽 [kuŋʔsɔŋ] (ほろりと : 涙ぐむさま) >

글썽하다 [kuŋʔsɔŋhada] (涙ぐんでいる)

뚜렷뚜렷 [ʔturjɔʰʔturjɔʰ] (はっきり, くっきり) >

뚜렷하다 [ʔturjɔʰʰada] (はっきりしている)

なお 하다 を 헤지다 (…くなる) にすることによって, これらをさらに動詞化して用いることも多い.

-럽다 [rɔpʰta] (-얼다 [ɔpʰta]) : 主として ㄱ を終声を持つ擬態語につく. 疊語形にはつかない.

미끌미끌 [miʔkuŋmiʔkuŋ] (ぬるぬる : 滑るさま) >

미끄럽다 [miʔkuŋrɔpʰta] (滑りやすい)

징글징글 [tʃiŋguldʒiŋgul] (いやらしく気持ちが悪いさま) >

징그럽다 [tʃiŋgurrɔpʰta] (いやらしい)

간질간질 [kangilganzil] (こちょこちょ : くすぐったいさま)

간지럽다 [kandzirɔpʰta] (くすぐったい)

어질어질 [ɔdzirɔdzil] (ふらふら : 眩暈がするさま)

어지럽다 [ɔdzirɔpʰta] (ふらふらする)

매끈매끈 [meʔkuŋmeʔkuŋ]

(すべすべ : 肌などがすべらかなさま)

매끄럽다 [meʔkuŋrɔpʰta] (すべすべしている)

合形成容詞 : 他の自立的な形容詞との合成語.

능글능글 [nuŋgullnuŋgul] (ずうずうしいさま) >

능글맞다 [nuŋgulmaʰta] (ずうずうしい)



③名詞をつくるもの

-이 [i] : 主として擬声語につく. 鳴き声について動物の名をつくることが多い.

- 기럭기럭 [kirɔk?kirɔk] (雁の鳴き声) >
- 기러기 [kirɔgi] (雁)
- 부엉 [puɔŋ] (ほうほう : みみずくの鳴き声) >
- 부엉이 [puɔŋi] (みみずく) (=부엉새)
- 괴골 [?kwe?kol] (高麗鶯の鳴き声) >
- 괴꼬리 [?kwe?kori] (高麗鶯)
- 삐죽 [?pɔ?kuk] (かっこう : かっこうの鳴き声)
- 삐죽기 [?pɔ?kugi] (かっこう) (=삐죽새)
- 개굴개굴 [kɛgulgegul] (けろけろ : 蛙の鳴き声) >
- 개구리 [kɛguri] (蛙)
- 멤멤 [mɛ:mmɛm] (みーんみん : 蟬の鳴き声) >
- 메미 [mɛ:mi] (蟬)
- 쓰르람쓰르람 [?sururam?sururam] (かなかな : ひぐらしの鳴き声) > 쓰르라미 [?sururami] (かなかな蟬, ひぐらし)
- 멍꽁멍꽁 [mɛŋ?koŋmɛŋ?koŋ] (じむぐり蛙の鳴き声) >
- 멍꽁이 [mɛŋ?koŋi] (じむぐり蛙)
- 홀쭉하다 [hol?tʃukʰada] (ほっそりしている) >
- 홀쭉이 [hol?tʃugi] (痩せっぽち)
- 뜰뜰하다 [?tol?torhada] (利発だ) >
- 뜰뜰이 [?tol?tori] (おりこうさん)
- 오뚝 [o?tuʔk] (鼻などが高いさま) >
- 오뚜기 [o?tugi] (起き上がり小法師)
- 각둑각둑 [?kak?tuʔk?kak?tuʔk] (ぶつぶつ : ぶつ切りにするさま) >
- 각뚜기 [?kak?tugi] (カクトッキ : 漬物の一種)

この型には一部に次のような幼児語的な例もあるがほとんどは一般語である :

- 멍멍 [mɛŋmɛŋ] (わんわん : 犬の鳴き声) >
- 멍멍이 [mɛŋmɛŋi] (わんわん : 犬) (=멍멍개)

-질 [tʃil] :

- 떨죽 [?tal?kuk] (ひっく : シャックリの音) >
- 떨죽질 [?tal?kuk?tʃil] (シャックリ)
- 도리도리 [toridori] (ふりふり : 幼児に首を振らせるかけ声) >
- 도리질 [toridzil] (首振り)

転成名詞 : 擬声擬態語そのままの形で名詞として用いるもの.

- 포포 [?po?po] (ちゅっ : かわいいキスの音) > (キス)
- 칙칙폭폭 [tʃhiktʃhikphokphok] (シュッシュュッポッポ : 汽車の音) > (シュッシュュッポッポ : 汽車の幼児語)

合成名詞 : 他の自立的な名詞との合成語. 商品名などにもしばしば用いられる.

- 멍멍-개 [mɛŋmɛŋ-ge] (わんわん : 犬) (=멍멍이)
- 꼬꼬-닭 [?ko?ko-daʔk] (鶏)
- 삐죽 [?pɔ?kuk] (かっこう : かっこうの鳴き声) >
- 삐죽-새 [?pɔ?kuk-?sɛ] (かっこう鳥) (=삐죽기)
- 뜸북뜸북 [?tuɔmbuk?tuɔmbuk] (こうらいくいなの鳴き声) >
- 뜸북-새 (こうらいくいな : 鳥の名) (=뜸북기)
- 덜렁덜렁 [tɔllɔŋdɔllɔŋ] (ちょちょこ : そそっかしいさま) >
- 덜렁쇠 [tɔllɔŋ-swe] (おっちょこちょい)
- 산들산들 [sandulsanduul] (そよそよ : 風が吹くさま) >
- 산들-바람 [sanduul-baram] (そよ風)
- 보슬보슬 [posuulbosuul] (しとしと) >
- 보슬-비 [posuul-bi] (霧雨)
- 휘-파람 [hwi-pharam] (口笛)
- 곱슬-머리 [kop?sul-mɔri] (ちりちり頭 : ちぢれ髪)
- 볼록-렌즈 [pollɔŋ-nendzɔ] (凸レンズ)
- 오목-렌즈 [omɔŋ-nendzɔ] (凹レンズ)
- 똑딱-단추 [?toʔk?taʔk-?tantʃu] (スナップボタン)
- 너털-웃음 [nɔtʰɔr-usuɔm] (高笑い)
- 종종 [tʃɔŋdʒɔŋ] (とっどっ : 小走りするさま) >
- 종종-걸음 [tʃɔŋdʒɔŋ-gɔruɔm] (小走り)

빙그레 [pinggure] (にっこり)>  
 빙그레-우유 [pinggure-uju] (にこにこ牛乳)  
 알뜰하다 [al?tuurhada] (つましい)>  
 알뜰-시장 [al?tuul-ʃidzaj] (つましい市場：団地などの自主市場)  
 알뜰-부부 [al?tuul-bubu] (しっかり夫婦)  
 삐삐-주전자 [?pi?pi-dzudzəndzə] (びーびー鳴るやかん)  
 주물럭-등심 [tʃumullək-?tuɯŋʃim] (もみひれ肉)  
 近年は単に擬態語의 주물럭 だけでもメニューの一つとして使われる.

その他：

펑펑 [?kweŋ?kweŋ] (かんかん：鉦の音)>  
 펑파리 [?kweŋgware] (クッエンガリ：鉦の一種)  
 미끌미끌 [mi?kuulmi?kuul] (ぬるぬる：滑るさま)>  
 미꾸라지 [mi?kuradzi] (どじょう)  
 귀뚜라미 [kwi?tulgwitʃul] (こおろぎの鳴き声)>  
 귀뚜라미 [kwi?turami] (こおろぎ)  
 딱다구리 [?tak?taguri] (きつつき)  
 찌르루 [?tʃirururuk] (棕鳥の鳴き声)  
 찌르레기 [?tʃiruregi] (棕鳥)  
 웨웁 [wegwek] (靑鷺の鳴き声)>  
 웨가리 [wegari] (靑鷺)  
 부풀부풀 [pupʰulbupʰul] (けばけば：けばだっているさま)>  
 부푸레기 [pupʰuregi] (けばけば：名詞)  
 둥글둥글 [tongguldonggul] (まるまる：丸いさま)>  
 둥그라미 [tonggurami] (丸)

#### ④ 副詞をつくるもの

-이 [i] :

곰곰 [ko:mgom] (つくづく)>  
 곰곰이 [ko:mgomi] (つくづく：よくよく考えるさま)  
 만뚝 [pandutʃi] (まっすぐなさま)>

반드시 [pandutʃi] (必ず)  
 헤죽헤죽 [hedzukkʰedzukkʰ] (へへっ：軽く笑うさま)>  
 헤죽이 [hedzugui] (へへっ)  
 빙긋 [pinggukʰ] (にこっ：笑うさま)  
 빙긋이 [pinggugi] (にこり：笑うさま)

擬声擬態語の派生については, Flak (1958)・(1961) がある.

擬声擬態語から一般語が派生したのか, 一般語から擬声擬態語が派生したのか定めにくいものも多い:

#### 動詞～擬声擬態語

흔들다 [huundulda] (振る, ゆする)  
 흔들흔들 [huundurhuundul] (ぐらぐら：揺れるさま)  
 부풀다 [pupʰulda] (けばだつ, ふくらむ)  
 부풀부풀 [pupʰulbupʰul] (けばけば：けばだっているさま)  
 비뚤다 [pi?tulda] (歪んでいる)  
 비뚤비뚤 [pi?tulbi?tul] (くねくね：まっすぐでないさま)  
 비틀다 [pitʰulda] (振じる, ひねる)  
 비탈 [pitʰal] (坂道)  
 비틀비틀 [pitʰulbitʰul] (よろよろ：よろけるさま)  
 꾸기다 [?kugida] (しわくちゃにする)  
 꾸깃꾸깃 [?kugiʰ?kugiʰ] (くしゃくしゃ：しわくちゃなさま)  
 기울다 [kiulda] (傾く)  
 기웃기웃 [kiutʰ?kiutʰ] (首を傾けのぞき込むさま)

次のように末尾に -ㄱ [k] や -ㅇ [ŋ] を持つ接尾辞によって擬声擬態語が作られたと思われるものもある:

울다 [u:lɔda] (泣く)>  
 울먹울먹 [ulmŋgulmŋkʰ] (今にも泣きそうなさま)  
 만지다 [mandzida] (いじる)>  
 만지작만지작 [mandzidzajmandzidzəkʰ] (しきりにいじくるさま)  
 주무르다 [tʃumuruɔda] (もむ)>  
 주물럭주물럭 [tʃumullŋkʰ?tʃumullŋkʰ] (もみもみ：もむさま)



조물락조물락 [tʃomulla<sup>k</sup>?tʃomulla<sup>k</sup>] (もみもみ：小さくもむさま)

알다 [a:l<sup>da</sup>] (知る, わかる) >

알쏭달쏭 [al<sup>?</sup>soŋdal<sup>?</sup>soŋ] (わかるようでわからない)

아리송아리송 [arisoŋarisoŋ] (今一つわからないさま)

### 形容詞～擬声擬態語

거칠다 [kot<sup>ʃ</sup>hilda] (荒い)

거칠거칠 [kot<sup>ʃ</sup>hiltʃot<sup>ʃ</sup>hil] (かさかさ：皮膚などが荒れたさま)

느리다 [nurida] (のろい)

느릿느릿 [nurinnuriri] (のっそり：動作がのろいさま)

둥글다 [tonggulda] (丸い)

둥글둥글 [tongguldonggul] (まるまる：丸いさま) >

둥그라미 [tonggurami] (丸)

드물다 [tumulda] (稀だ)

드문드문 [tumundumun] (ぼつぼつ：まばらにあるさま)

### 名詞～擬声擬態語

토막 [t<sup>h</sup>oma<sup>k</sup>] (ぶつ切りにしたもの)

토막토막 [t<sup>h</sup>oma<sup>k</sup>t<sup>h</sup>oma<sup>k</sup>] (ぶつ切りにするさま)

얼룩 [ollu<sup>k</sup>] (しみ, まだら)

얼룩얼룩 [ollugollu<sup>k</sup>] (しましま：まだらなさま)

## 2. 擬声擬態語の単語結合・シンタックス・テキスト

### 2-1. 擬声擬態語の単語結合とシンタックス

擬声擬態語のうち, 特に擬声語は共起する動詞が決まってくる. 울다 [u:l<sup>da</sup>] (泣く, 鳴く)・웃다 [u<sup>?</sup>ta] (笑う)・짓다 [tʃi:<sup>?</sup>ta] (ほえる)・들리다 [tu:l<sup>li</sup>da] (聞こえる)・떨어지다 [t<sup>?</sup>orodʒida] (落ちる)などである. 擬声語と共起しやすい単語結合としては 소리(가)나다 [soriganada] (音・声が出る)・소리(를)내다 [soriru:l<sup>le</sup>da] (音・声を出す)がある.

擬態語と形容詞との結合がかたいものも見られる:

꼭 같다 [t<sup>?</sup>o<sup>k</sup>?ka<sup>?</sup>ta] (びったり同じだ)

꼭 같다 [t<sup>?</sup>o<sup>k</sup>?ka<sup>?</sup>ta] (びったり同じだ)

꼭 맞다 [t<sup>?</sup>o<sup>k</sup>ma<sup>?</sup>ta] (びったり合う)

딱 맞다 [t<sup>?</sup>taɰma<sup>?</sup>ta] (びったり合う)

辞書によってはこれらを一単語として登録している.

擬態語と用言の結合がかたい例としては次のようなものもある:

깜짝 놀라다 [t<sup>?</sup>kam<sup>?</sup>tʃa<sup>k</sup> nollada] (びっくりする)

곰곰이 생각하다 [komgomi seŋgak<sup>h</sup>ada] (つくづく考える)

벌떡 일어나다 [p<sup>?</sup>al<sup>?</sup>t<sup>?</sup>o<sup>k</sup> ir<sup>?</sup>onada] (がぼっと起きる)

텅 비다 [t<sup>h</sup>oŋ pi:da] (がらんと空いている)

통통 붓다 [t<sup>h</sup>oŋt<sup>h</sup>oŋ pu:<sup>?</sup>ta] (ぼんぼんに腫れる)

눈물이 핑 돌다 [nunmuri p<sup>h</sup>iŋ to:l<sup>da</sup>] (涙がじんとにじむ)

日本語の「ぼーっと」の「と」にあたる -하고 [hago] (…と)を用いる場合と用いない場合とがある. [ ]は任意のもの:

기적소리가 뚜 [하<sup>고</sup>] 울렸다.

汽笛の音がぼーっと鳴った.

기적소리가 뚜 하<sup>고</sup> 들렸다.

汽笛の音がぼーと聞こえた.

뚜 기적소리가 들렸다.

ぼーと汽笛の音が聞こえた.

개가 멍멍 [하<sup>고</sup>] 짖었다.

犬がわんわん(と)ほえた.

전화가 따르릉 [하<sup>고</sup>] 울렸다.

電話がじりりと鳴った.

전화소리가 따르릉 났다.

電話の音がじりりと鳴った.

피꼬리가 피깔피깔 [하<sup>고</sup>] 울었다.

鶯がぼーほけきょと鳴いた.

피깔피깔 [하<sup>고</sup>] 피꼬리가 울었다.

ぼーほけきょと鶯が鳴いた.

달가닥 [하<sup>고</sup>] 소리가 났다.

がたんと音がした.

하교は擬声語ごとにその使用が決まっているというよりはシンタックスとの関係のほうが問題になる. 들리다 (聞こえる) の直前では하교は通常義務的である. 文体にもかかわっていて話しことばでは落ちる傾向にある. なお擬態語には通常하교を用いない. またこの하교は하면・하면서・해도・하느……と, 動詞同様の变化をするので日本語の「と」とは違って動詞と考えるべきであろう.

擬声擬態語は基本的には副詞であるが, 前述のように派生語は様々な品詞がある. 짹짹 [ʔkamʔtʃak] は次のようにしばしば述語にもなる:

아이고 짹짹이야.

ああ, 驚いた. /ぎょだね.

擬態語かどうか難しいところだが작작 [tʃakʔtʃak] (たいがいに) のように必ず命令や当為と共起するものもある:

모르는 소리 좀 작작 해라.

わからんこと言うのもいいかげんにしろ. |

## 2-2. テキストにおける擬声擬態語

テキストにおける擬声擬態語は極めて重要な位置にあるにもかかわらず, これに関する研究はほとんどなされてこなかった.

### 2-2-1. 語層としての擬声擬態語の使用頻度

朝鮮語では詩はもちろんのこと, 小説でも例えば全編に까작까작 [ʔkadgakʔkadgak] というかささぎの鳴き声をちりばめた金東里の『까치소리 [ʔka:tʃʰisori] (かささぎの声)』など, 擬声擬態語をとりわけ意識的に用いた作品が見られる. こうした例は日本語の文学作品にもいくらかで見出せよう.

ところが, 日本語に劣らず朝鮮語では一般的な傾向として擬声擬態語が多用されている. 小説を例にとって, それぞれのテキストがいくつかの文からなり, そのうちいくつかの文に擬声擬態語が使用されているかを調べてみると次のとおりである:

李光洙『無情』第1回 (1917年) 全77文 うち8文, 10.4%

金東仁『감자 (芋)』(1925年) 全199文 うち17文, 8.5%

朴英熙『사냥개 (獵犬)』(1925年)

全193文 うち22文, 11.4%

玄鎮健『故郷』(1926年)

全145文 うち23文, 15.9%

洪命慈『林巨正傳』(1928年)

冒頭の100文 うち14文, 14.0%

李北鳴『암모니아 탱크 (アンモニアタンク)』(1932年)

全89文 うち19文, 21.3%

金東里『췌레꽃 (野茨)』(1934年)

全99文 うち13文, 13.1%

金裕貞『동백꽃 (樺の花)』(1936年)

全159文 うち42文, 26.4%

李孝石『모밀꽃 필 무렵 (蕎麦の花咲く頃)』(1936年)

全255文 うち37文, 14.5%

李泰俊『沙漠의 花園 (砂漠の花園)』(1937年)

全47文 うち5文, 10.6%

黃順元『학 (鶴)』(1953年)

全142文 うち13文, 9.2%

李浩哲『나상 (裸像)』(1956年)

全295文 うち101文, 34.2%

崔仁勳『九月의 다알리아 (九月のダリア)』(1960年)

全86文 うち25文, 29.1%

崔仁浩『他人의 房 (他人の部屋)』(1971年)

全359文 うち55文, 15.3%

朴婉緒『겨울 나들이 (冬の外出)』(1975年)

全304文 うち48文, 15.8%

金承鉦『위험한 나이 (危険な歳)』(1986年)

全76文 うち12文, 15.8%

金周榮『어머니를 위하여 (母さんのために)』(1986年)

全67文 うち8文, 11.9%

会話文のみならず一般に地の文で多用される. また擬声擬態語の使用によって文体が話しことば的になるということもない. 李浩哲『나상 (裸像)』に至っては, 実際には文とは言えない「“……”」という,

沈黙を表す「文」が 18 文も含まれているので、実質的には全 277 文となり、擬声擬態語を含む文は 36.5% に達する。同作品を単語数で見ると総計 2319 語のうち 192 語、8.3% の単語が擬声擬態語で、およそ 12 語の一つはオノマトペが用いられているということになる。

同様に日本語の小説と比較してみる：

|                           |            |          |       |
|---------------------------|------------|----------|-------|
| 夏目漱石『一夜』(1905年)           | 全 282 文    | うち 30 文, | 10.6% |
| 森鷗外『電車の窓』(1910年)          | 全 152 文    | うち 20 文, | 13.2% |
| 志賀直哉『出来事』(1913年)          | 全 155 文    | うち 23 文, | 14.8% |
| 内田百閒『冥途』(1921年)           | 全 85 文     | うち 21 文, | 24.7% |
| 芥川龍之介『藪の中』(1922年)         | 全 273 文    | うち 12 文, | 4.4%  |
| 里見弴『椿』(1923年)             | 全 92 文     | うち 19 文, | 20.7% |
| 横光利一『幸福の散布』(1923年)        | 全 33 文     | うち 2 文,  | 6.1%  |
| 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』(1925年)   | 全 86 文     | うち 6 文,  | 7.0%  |
| 井伏鱒二『鯉』(1926年)            | 全 88 文     | うち 1 文,  | 1.1%  |
| 梶井基次郎『蒼穹』(1928年)          | 全 58 文     | うち 5 文,  | 8.6%  |
| 太宰治『満願』(1938年)            | 全 41 文     | うち 8 文,  | 19.6% |
| 石川淳『張栢端』(1941年)           | 全 152 文    | うち 25 文, | 16.4% |
| 島尾敏雄『摩天楼』(1946年)          | 全 159 文    | うち 21 文, | 13.2% |
| 安部公房『赤い蘭』(1949年)          | 全 95 文     | うち 5 文,  | 5.3%  |
| 埴谷雄高『虚空』(1950年) 冒頭の 100 文 | うち 13 文,   | 13.0%    |       |
| 野間宏『二つの花』(1956年)          | 全 60 文     | うち 3 文,  | 5.0%  |
| 井上光晴『地の群れ』(1963年)         | 1 章全 222 文 | うち 32 文, | 14.4% |

もちろん作家個人の文体差もあり、またどの単語を擬声擬態語と見るかについての個人差もあろうが、それらを考慮しても朝鮮語のテキストにおける擬声擬態語多用の傾向は疑いようもなく、注目すべきであろう。とりわけ短い会話文の多いテキストよりも、描写的な地の文の多いテキストで擬声擬態語が多用される傾向がある。

## 2-2-2. 個々の擬声擬態語の使用頻度

一方、個々の擬声擬態語の中には頻度の高い単語はほとんどない。例えば韓国文教部の語彙使用頻度調査では上位 100 語以内に擬声擬態語はほとんど見当たらない。368 位に ㅍ [pʰok] (必ず、きっと) が出るが擬態語とは感じられないことも多い。735 位にかろうじて 따뜻한 [tʰatʰatʰada] (暖かい) が出、1000 位以降に 1002 位 깨끗하다 [pʰeʰkʰeʰtʰada]・1214 位 튼튼하다 [tʰuʌnʰuʌnhada]・1499 位 넉넉하다 [nɔŋnɔkʰada] が続くが、どれも擬態語というよりはほとんど一般語に近い中間的な形容詞である。なお 593 位에 얼른 [ɔlluʌn] (さっさと)・595 位에 반드시 [pandʌʃi] (必ず) があるが普通は擬態語としない。

以上のようなことから見ると朝鮮語のテキストにおいては、擬声擬態語は個々の単語として高頻度で用いられているのではなく、一つのまとまった大きな語層として多用されていることがわかるのである。

最近刊行された青山秀夫編著 (1991) 『朝鮮語象徴語辞典』(大学書林) には文学作品から収集された擬声擬態語の用例の頻度が記されている。収録語数約 8800 語のうち、頻度が 30 以上の単語を拾い出してみると 168 語あった。そのうち頻度 50 以上は 65 語、100 以上は 10 語であった。頻度の高い順に 10 位までを見ると次のとおりである。なお訳語は論者による：

- ① ㅍ [pʰok] (ぐっと、きっと) 250
- ② 불쑥 [pulʰsuk] (ぐっと、にゅっと：出るさま) 158
- ③ 빈쩍<sup>2</sup> [pɔnʰtʃɔk] (ぎらり、ぎらり：光るさま) 145
- ④ 꺾꺾 [pʰkomʰtʃak] (びくり：動くさま) 139
- ⑤ 탁 [tʰak] (どん、ぼん：ぶつかったり叩くさま) 132
- ⑥ 벌떡 [pɔlʰtɔk] (かばっ：起き上がるさま) 130
- ⑦ 멩하네 [mɔ:ŋhani] (ぼんやり：人が) 121
- ⑧ 문득 [munʰtuʰk] (ふと：思いつくさま) 117
- ⑨ 잔뜩 [tʃanʰtuʰk] (いっぱい、たっぶり) 116
- ⑩ 충얼거리다 [tʃunɔlgorida] (ぶつぶついう：つぶやくさま) 102



### 3. おわりに

豊富な材料を持つ朝鮮語のオノマトペ研究はこれまで触れたように一定の研究成果を得ているけれども、青山秀夫（1972）などを除いては、一語一語についての具体的な用例についての研究はほとんどなされず、おおむね辞書などの語彙リストという二次資料を対象にしたものが多かった。そういった意味では、青山秀夫（1991）『朝鮮語象徴語辞典』の刊行は重要で、これによって擬声擬態語研究はさらに前進したと言える。今後はこうしたことを踏まえて次のような研究がより一層推し進められねばならない：

- 1) どのような擬声擬態語がどのように用いられているかという、意味・用法の研究
- 2) どのような擬声擬態語がどのくらいの頻度で用いられているかという、計量的研究

いずれも単に語彙リストを対象にするのではなく、広範な一次資料のテキストを分析し、生きた擬声擬態語の現実を把握することが重要である。広く用いられる単語なのか、潜在的な単語なのか、全くの死語なのか、そうした峻別に基づく語彙リスト＝辞書の再編成は少なくとも不可欠である。何にせよ具体的な言語事実に立脚した研究が必要なのである。同時に、そのことは擬声擬態語のみならず、固有語一般、あるいは広く朝鮮語の語彙一般について同様の研究が必要だということの意味する。そうすることによって初めて擬声擬態語の特質を明らかにできるのであり、更には広く諸言語を対象にした〈オノマトペ類型論〉とでも言うべき研究へと展開する基礎が獲得できるであろう。

参考文献については学習院大学言語共同研究所紀要第 13 号、野間秀樹（1990）「朝鮮語のオノマトペ——擬声擬態語の境界画定、音と形式、音と意味について——」を参照。なお徐尚揆編（1991）「의태어용례집」（未公開）も参考になった。

（東京外国語大学講師）